

関学生の Mastery for Service*

— 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析（5）—

中 野 康 人**

いる。

1 本稿の目的

“Mastery for Service”。本稿の目的は、このスクールモットーを社会学部卒業生がどのように解釈し、また卒業後の実生活の場面でどのように意識しているのかを記述的に紹介することにある。

国策として国家という主体が中心的に設立してきた国立大学に比べて、多様な母体が運営する私立大学は、独自の建学の精神やモットーをもっている。菅（2008）は、私立大学が建学の精神をそのアイデンティティとして重視している一方で、日本最初の国立大学である東京大学に建学の理念が明確になかったことを指摘し、他の国立大学も同様であるとしている。もちろん、国立大学にも各自の経緯や個性はあるだろうし、法人化の流れの中で国立大学でも自らの建学の精神やモットーを発見・制定する動きはある。しかし変革期を迎えた大学業界において、各私立大学はそれぞれの特色の根源を建学の精神やモットーといった原点により強く求めようとしている¹⁾。朝日新聞の記事データベース「聞蔵Ⅱ」において、1985年1月1日から2010年11月30日までの記事を「スクールモットー」というキーワードで検索すると、該当する記事は二件のみであり、そのどちらもが関西学院に関する記事である²⁾。「建学の精神 大学」というキーワードでの検索結果は、171件で、そのほとんどは私立大学に関する記事か大学政策に関するものである。大学に関する政策的方向としては、中央教育審議会は次のような答申を出して

さらに、私立大学については、特に戦後の我が国における高等教育の普及、先端的・独創的な研究の進展、高等教育機関の社会貢献の促進の面でそれぞれ大きな役割を果たし、社会の発展にとって重要な貢献をしてきた。とりわけ、各大学の建学の精神を生かした独自の校風による教育・研究の実施は、多様性に富んだ個性豊かな人材の育成や、多様な知的価値の創造等を通して、我が国のあらゆる面での発展を支えてきている。

《中略》

こうした各大学の多様な発展を一層促進するためには、それぞれの建学の精神にのっとりた自主的・自律的な運営を確保することが不可欠であり、先般の私立学校法改正による学校法人制度の管理運営面の改善の趣旨を積極的に生かすことが期待される。

【中央教育審議会「我が国の高等教育の将来像（答申）」平成17年1月28日】

（下線は筆者による）

このような状況を鑑みると、学部創立50周年の節目に、スクールモットーとそこで学んだ学生との関係について考察することは、これからの社会学部を考えていく上でも意義のあることといえるだろう。

『関西学院事典』（2001）には、ベーツ院長の言葉としてスクールモットーの意味が次のように説

*キーワード：スクールモットー、テキスト分析、因果推論

**関西学院大学社会学部教授

1) 例えば、日高（2009）、杉村（2006）を参照。

2) 一件は、2001年01月17日の「関学に刻もう「奉仕の精神」 学内団体がプレート寄贈」という記事。もう一件は、1989年05月22日の「軍が壊した英文紋章、47年ぶり母校関学へ 学生が破片隠す」である。

かれている。

人間の本性には二つの側面がある。一は個人的、私的なもの、他は公共的、社会的なもの…そして今やこの両面が我らのモットー“Mastery for Service”において統合される…我らは弱きを欲しない。強からんこと…主たらんことを希う…しかし我らが主たらんと希う目的は、己れ個人の富を積むことではなく、かえって世に仕えることではなくてはならない。我らは広義における人類の仕え人たらんことを目指すものである…

1915年の『商光』創刊号に掲載されたこの言葉は、その後約100年にわたる関西学院における教育の根源的な支柱として多くの教員・学生の心にすり込まれてきたものである。校歌にもエンブレムにも刻まれたこの言葉は、関西学院に集うものをつなぐ紐帯の根幹をなすものといってもよいだろう。とはいえ、前後の補足的な説明を抜きにして“Mastery for Service”という言葉だけが前面に出ると、はたしてそれが実際にどのようなことを意味するのか、抽象度が高い語句だけにわかりづらくもある。以下では、調査データに基づいて、関西学院大学社会学部で教育を受けた卒業生が、その後の生活の中でこのスクールモットーをどのように意識し、実践してきたかを明らかにしていく。スクールモットーをひとつの社会規範として捉えれば、関西学院大学で社会化された卒業生が、いかにその規範を内面化しているのか、と

いうことにもこの分析はつながる。

2 分析の方法と対象

分析の対象となるのは、関西学院大学社会学部卒業生調査のデータである。関西学院大学社会学部では、2009年9月から2010年1月にかけて社会学部卒業生約24000名のうち、7551名を単純無作為抽出法により選び、自記式の郵送法により、調査をおこなった。調査主体は、関西学院大学社会学部50周年記念事業委員会である。回収数は2169票、回収率28.7%であった³⁾。

この調査では、社会学部卒業生にその学生時代の勉学や生活のことをたずねるとともに、卒業後のライフコースや学生時代に学んだこととの関係も質問している。本報告の主要な分析対象となるのは、以下のような質問である。

大学卒業後、関西学院大学のスクールモットーである“Mastery for Service”を意識したことはありますか。あるとすれば、どのような場面でのことでしょうか。できるだけ具体的にあなたのご経験をお書き下さい。

回答者は自由記述方式でこの問いに答えている。

以下では、記述されたテキストを計量的に解析し、さらに他の質問項目との関係を分析していく。関連を見る項目は、回答者の基本的な属性や意識（性別、卒業年、初職、生活満足度⁴⁾）、大学に関わる経験や意識（学生時代の成績⁵⁾）、在

3) この調査の内容については、渡邊（2010）と中野（2010）も参照。

4) 質問内容は以下の通り。

あなたは、現在のご自身の生活全般についてどの程度満足していますか。

1. 非常に満足している
2. 満足している
3. やや不満
4. 不満である
5. どちらでもない

5) 質問内容は以下の通り。

あなたの学生生活における勉学面についてお尋ねします。総単位数に占める「優（80点以上、「秀」も含む）」の割合はどれくらいでしたか。

1. ほとんど優だった
2. 優が多かった
3. 優が半分くらい
4. 優は少なかった
5. ほとんど優はなかった

学中の満足度⁶⁾、学生時代の主な所属団体⁷⁾、関学への愛着度⁸⁾）である。

自由記述の分析の中で、卒業年との関係を見ることによって記述内容の経年変化がわかる。学生時代の経験との関係は、大学での学びがその後の“Mastery for Service”にどのような影響を与えるかを明らかにする。職業経験との関係は、異なる社会的場面における“Mastery for Service”を浮かび上がらせる。また現在の意識との関係はスクールモットーと現状の生活との関係の一側面を教えてくれる。

3 結果

3.1 記述の有無

まず、具体的記述があった回答者となかった回答者（無回答ならびに「ない」などの回答）で、属性の違いがあるのか、確認してみる（図1）。2169票のうち、全体の約6割である1296票に何らかの記述があった。ただし、記述内容が「特にない」「ない」など、まったく意識した内容が書かれていない回答が236票あった。したがって、具

体的な記述があるのが1060票、無記入または具体的記述がないものが1088票となり、“Mastery for Service”を具体的に意識する経験がある回答者は、おおよそ半数ということになる。

性別では男性が、卒業年では1960年代の卒業生が、より具体的記述をする傾向がみられた。成績と記述の有無の関係は有意ではなかった。初職との関係では、サービス、管理、生産工程・労務が比較的多く記述するという関係があった。また、現在の生活に対する満足度と具体的記述の有無の関係は、満足している人ほど具体的記述をするという関連が有意に存在する。学生時代の所属団体との関係では、文化系の活動をしていた人ほどよく具体的な記述をするという関係がある。

学生時代の満足度と具体的記述の有無の関係は、8つの満足度のうち(a)講義内容、(b)ゼミ内容、(c)実習内容、(d)ゼミ担当教員の指導、(e)大学の施設・環境、(f)友人関係に関しては満足度が高いほど具体的記述をする割合が高くなるという関係がある。(g)サークル・部活動と(h)アルバイトに関する満足度と記述の有無の間には有意な関係は見出せなかった。さらに具体的記述があるかない

6) 質問内容は以下の通り。

在学中、次のような学習や経験に対してどの程度満足していましたか。((a)講義内容、(b)ゼミ内容、(c)実習内容、(d)ゼミ担当教員の指導、(e)大学の施設・環境、(f)友人関係、(g)サークル・部活動、(h)アルバイト)

1. とても満足していた
2. まあ満足していた
3. どちらでもない
4. あまり満足していなかった
5. 満足していなかった

7) 質問内容は以下の通り。

在学中、あなたはどのような団体（サークル、部活）に参加していましたか。複数ある場合は、最も活動していたサークル、部活についてお答え下さい。

1. 体育系
2. 文化系
3. その他

8) 質問内容は以下の通り。

関西学院大学に対する以下の意見について、あなたご自身のお気持ちはどの程度当てはまりますか。((a)現在でも関学に強い結びつきを感じている、(b)関学のOB・OGであることをよく意識する、(c)関学の人たちが好きだ、(d)関学を卒業したことを誇らしく感じている、(e)関学に愛着を持っている、(f)できるなら関学に関係ある人と関わりたい、(g)関学に思い入れがある、(h)関学のOB・OGには、いい人が多いと思う、(i)関学のOB・OGであることをうれしく思う)

1. とてもあてはまる
2. まああてはまる
3. どちらともいえない
4. あまりあてはまらない
5. あてはまらない

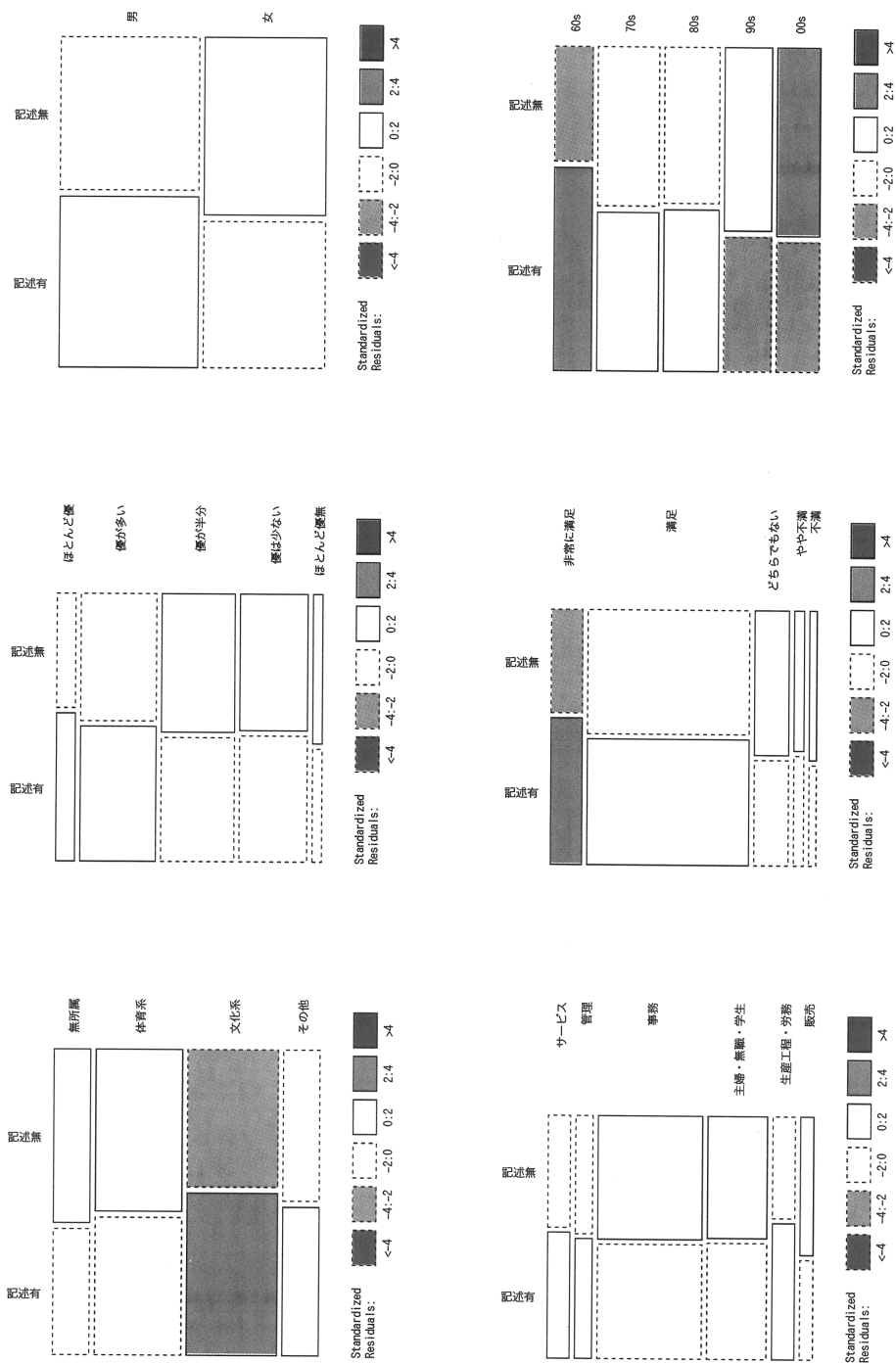


図1：回答者属性と記述の有無の関係

表 1：具体的記述の有無と学生時代の総合満足度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.17	0.17
標準偏差	(1.68)	(1.66)	(1.68)

$$t = -4.45, df = 1880.75, p = 0.00$$

表 2：具体的記述の有無と関学への総合愛着度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.58	0.56
標準偏差	(2.39)	(2.40)	(2.26)

$$t = -11.04, df = 2026.94, p = 0.00$$

表 3：具体的記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2	model 3	model 4	model 5
切片	-41.36 ***	-0.51 *	0.12	-0.62 **	43.89 ***
卒業年	-0.02 ***				-0.02 ***
性別（女性 d）	—				—
性別（男性 d）	-0.15 .				0.22 *
学生時代総合満足度		0.10 ***			0.01
所属団体（無所属 d）		—			—
所属団体（体育系 d）		0.06			0.03
所属団体（文化系 d）		0.41 **			0.35 *
所属団体（その他 d）		0.18			0.13
学生時代成績		0.09 .			0.19 ***
初職（サービス d）			—		—
初職（管理 d）			-0.11		-0.06
初職（事務 d）			-0.20		-0.21
初職（主婦・無職・学生 d）			-0.17		-0.15
初職（生産工程・労務 d）			0.17		0.12
初職（販売 d）			-0.45 .		-0.42
総合愛着度				0.21 ***	0.22 ***
生活満足度				0.18 **	0.16 *
AIC：	2903.4	2517.5	2956.5	2638.0	2186.0

****： $p < .001$ ，***： $p < 0.01$ ，**： $p < 0.05$ ，.： $p < 0.10$

かで、8つの項目を総合した満足度⁹⁾の平均値を比較すると、具体的記述をしている回答者の方が満足度が有意に高いことがわかる（表1）。

関学への愛着と具体的記述の有無の関係は、9つの項目すべてについて関学にポジティブな意識を持っている回答者ほど具体的な記述をする有意な関係があった。具体的記述があるかどうかで、9つの項目を総合した愛着度¹⁰⁾の平均値を比較すると、具体的記述をしている回答者の方が愛着度が有意に高いことがわかる（表2）。

これらの各変数の影響を総合的に分析するために、具体的記述の有無を被説明変数として、卒業年、性別、学生時代の総合満足度、所属団体、学生時代の成績、初職、総合愛着度、生活満足度を説明変数にしたロジスティック回帰分析を行った。その結果、初職と学生時代の総合満足度は有

意でなくなり、残りの変数の効果の有無は単相関レベルの関係と同様であった。

回帰係数を見ると、所属団体の影響が比較的大きく、無所属に比較すると文化系の団体に入っている人は具体的記述をする傾向が約1.4倍あるといえる。自由記述の中には「“Mastery for Service”を意識するのは、クラブ活動等をしてきた人だ」という回答もあった。この指摘をした回答者は、おそらく体育会系の運動部を想定しているものと推測されるが、傾向としては体育系よりも文化系団体に所属していた人の方が具体的回答が多い。ただし、所属団体のデータはサークルと公式なクラブを区別していないので注意が必要である。確実に言えることは、無所属の回答者が一番記述がない割合が高いということである。

次に関係が深いのは、性別と総合愛着度であ

9) 8つの満足度を主成分分析に投入して算出した主成分得点。

10) 9つの愛着度を主成分分析に投入して算出した主成分得点。

表 4：頻出単語

こと (676)	意識 (448)	時 (393)	人 (347)	仕事 (342)	Service (322)	for (318)	Mastery (318)
自分 (287)	よう (250)	社会 (229)	の (219)	事 (202)	ため (197)	活動 (186)	中 (185)
精神 (174)	奉仕 (156)	的 (151)	モットー (142)	関学 (138)	私 (125)	ボランティア (123)	何 (114)
生活 (110)	子供 (102)	会社 (101)	者 (101)	現在 (90)	等 (88)	とき (86)	もの (86)
為 (86)	大学 (86)	言葉 (84)	今 (83)	後 (73)	心 (73)	スクール (72)	年 (72)
方 (72)	福祉 (71)	行動 (68)	地域 (67)	会 (66)	関係 (62)	日々 (61)	場面 (60)
時代 (56)	上 (55)	貢献 (54)	卒業 (54)	それ (53)	学生 (53)	際 (53)	お客様 (48)
参加 (48)	自身 (47)	校歌 (46)	意味 (45)	人生 (45)	人間 (44)	大切 (44)	一 (43)
サービス (42)	職 (42)	学校 (41)	経験 (40)	職場 (40)	様 (40)	就職 (39)	身 (38)
達 (38)	これ (37)	教育 (37)	部 (36)	1 (35)	気持ち (35)	業務 (35)	実践 (35)
他人 (35)	立場 (35)	さ (34)	企業 (34)				

る。いずれも係数は0.22となっている。したがって、女性よりは男性の方が、具体的記述をする可能性が約1.25倍高いということを意味する。また、総合愛着度が1単位高い回答者は、具体的記述をする可能性が約1.25倍高いということになる。学生時代の成績も、一段階の成績の変化が記述の有無に約1.21倍の変化をもたらす。また、生活満足度の効果も約1.17倍である。

3.2 “Mastery for Service” の概要

次に、自由記述の具体的な内容についてみてみる。“Mastery for Service” の自由記述をテキスト分析した結果、表4のような単語が頻出単語として抽出された。テキストは、形態素解析ソフト MeCab¹¹⁾を利用して単語に分割した。

一般的な頻出単語（助詞など）、質問文中にあった単語（意識、Mastery for Service など）を除けば、目につくのが「仕事」「自分」「社会」「活動」「精神」「奉仕」「ボランティア」「子供」「会社」などである。これらは、意識する場面につ

いてであったり、意識する内容であったりする。

単語の共起関係を分析したところ、図2のようなネットワーク図が抽出できた。この図は、出現頻度10回以上の二単語のつながり（bigram）を図示したものである。また、いくつかの注目単語について、その共起語を表5にまとめた¹²⁾。「仕事」に関しては、「福祉－仕事」、「仕事－上」、「仕事－する」、「仕事－柄」、「仕事－関係」、「仕事－において」など、回答者の仕事の中で“Mastery for Service” が意識されることが記述されている。「福祉」や「医療」など、具体的な職種に関する記述もあるが、仕事で人に接する際の態度や仕事上の心構えとしての記述が多く見られる。「自分」についての共起語は、「自分－以外」、「自分－利益」など「誰のためのものか」という位置づけの記述があることがわかる。また、「自分－成長」、「自分－磨く」、「自分－高める」など、“mastery” に重点をおいた記述も少なくないこともわかる。「社会」の共起語は、「社会－貢献」、「社会－福祉」、「社会－奉仕」などである。

11) MeCab については、<http://mecab.sourceforge.net/>を参照。辞書は、IPA 辞書を使用した。

12) 前後5語以内にあり共起の指標T値が1.65以上となる単語。ただし、助詞等の頻度600回以上の高頻度語はリストから除外している。

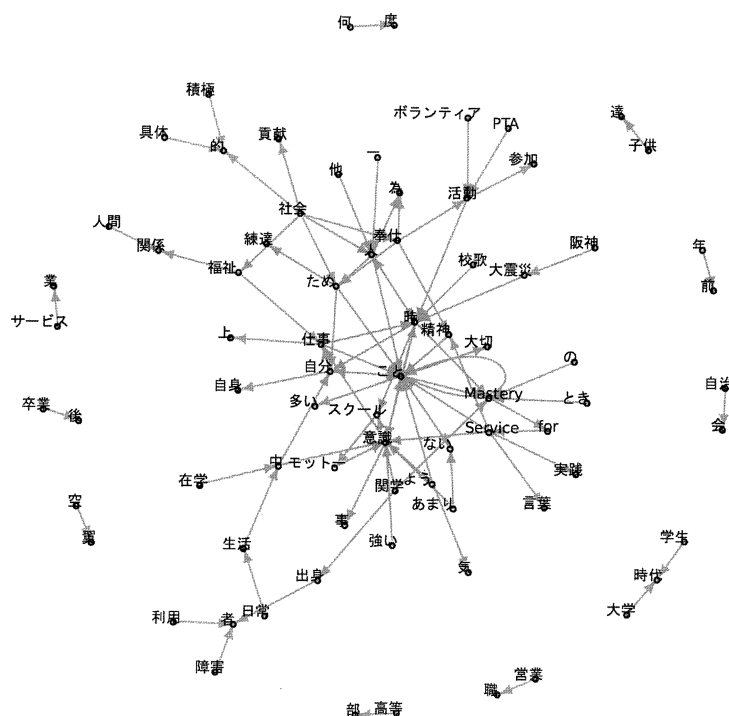


図 2：“Mastery for Service” 自由記述の bigram ネットワーク

表 5：注目単語の共起語

【注目単語】	【仕事】	【自分】	【社会】	【活動】
共起語	福祉	自身	社会	ボランティア
	上	できる	貢献	参加
	柄	ため	福祉	PTA
	関係	出来る	人	地域
	生活	なり	ため	会
	社会	だけ	出る	時
	において	利益	奉仕	奉仕
	現在	磨く	役立つ	自治
	現場	範囲	的	学校
	日々	以外	学	清掃
	医療	より	として	サークル
	ながら	成長	問題	支援
	営業	何	地域	子供
	日常	振り返る	生活	大震災
		高める	中	年間
		中	専攻	部
		時間	を通して	ボーイスカウト

表 6 : 分析対象の単語群

単語群	単語	回答数
「自発」系	—	175
	ボランティア	114
	PTA	27
	地域	59
	自治	13
「仕事」系	—	401
	仕事	266
	会社	89
	お客様	42
	職場	38
	業務	31
	公務員	26
	顧客	17

「活動」に共起するのは、「ボランティア活動」、「活動－参加」、「PTA－活動」、「地域－活動」、「奉仕－活動」などである。いずれも、“Mastery for Service”と関連づけられる具体的行動の側面があらわになる。

では、こうした異なる内容の記述が、回答者のどのような属性や意識と関連しているのだろうか。以下では、記述内容の主要な二側面（表6）について分析を続ける。

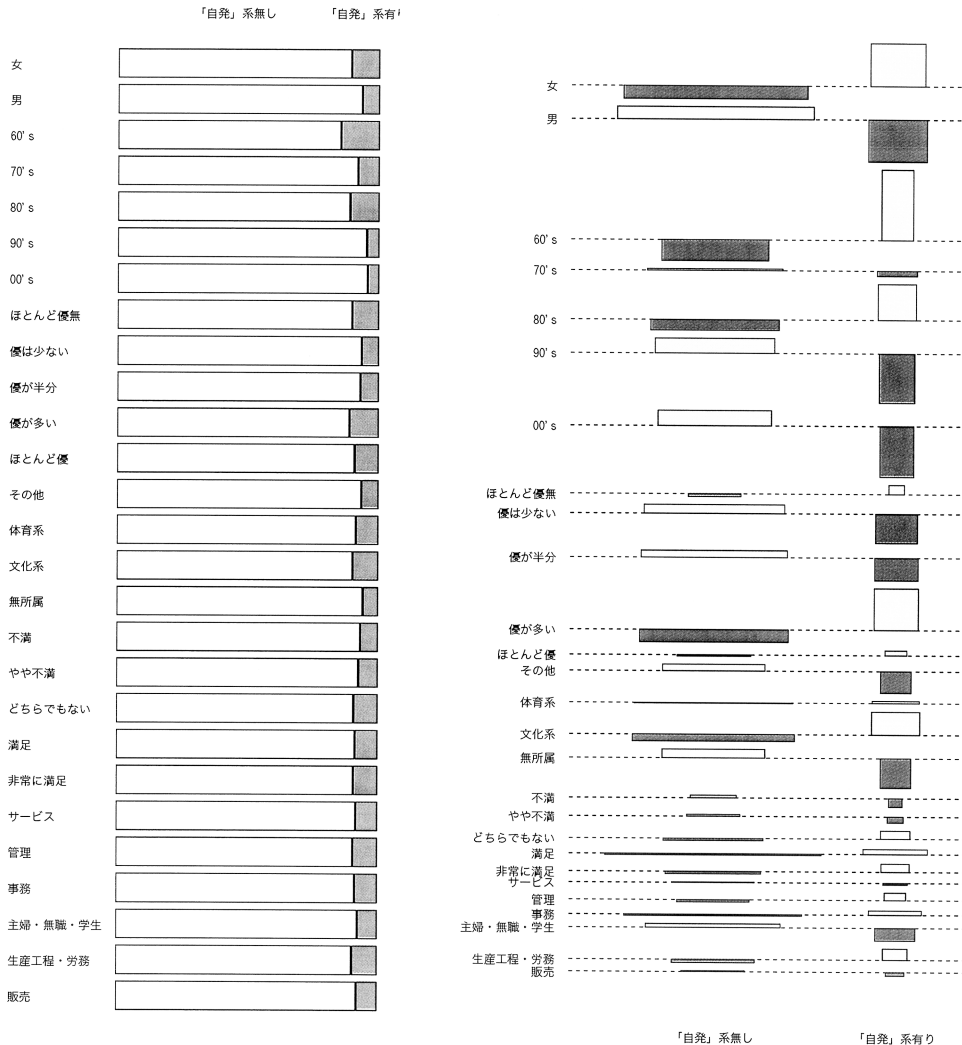


図3：回答者属性と「自発」系記述有無との関係

3.3 「ボランティア」としての “Mastery for Service”

ここからは、“Mastery for Service” の場としての自発的結合組織（ボランタリーアソシエーション）や自発的活動（ボランティア）に注目してみる。“Mastery for Service” は「奉仕への練達」と訳されることが多い。“Service” を「奉仕」と訳しているわけだが、日本語の語感としては、「奉仕」は「ボランティア」と結びつけられやすい。『大辞泉』には「ボランティア」の定義として「無償の奉仕活動をする人」ということがあげられている。「奉仕」そのものの辞書的な定義は「利害を離れて国家や社会などのために尽く

すこと」（『大辞泉』）とある。ベーツ院長の言葉の文脈を捉えてみても、利己を忌避して社会に奉仕するという方向性が見て取れる。「ボランティア」をはじめとする自発的な活動はそうした奉仕を具体化する身近な活動として捉えられていることがわかる。

以下、「ボランティア」、「PTA」、「地域」、「自治」といった、自発的活動やボランタリーアソシエーションに関する記述を「自発」系記述としてコード化する（表6）。回答の中で「自発」系記述は全体の約8%、具体的記述中では約17%を占める。属性との関係では、女性、60年代卒、80年代卒、成績が中間でない（ほとんど優、優が多

表 7 : 「自発」系記述の有無と総合満足度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.03	0.31
標準偏差	(1.68)	(1.69)	(1.55)

$$t = -2.54, df = 182.51, p = 0.01$$

表 8 : 「自発」系記述の有無と関学への総合愛着度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.05	0.58
標準偏差	(2.39)	(2.42)	(2.01)

$$t = -3.92, df = 220.94, p = 0.00$$

表 9 : 「自発」系記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2	model 3	model 4	model 5
切片	85.49 ***	-3.27 ***	-2.44	-2.49 ***	92.67 ***
卒業年	-0.04 ***				-0.05 ***
性別 (女性 d)	—				—
性別 (男性 d)	-0.90 ***				-1.01 ***
学生時代総合満足度		0.08			0.04
所属団体 (無所属 d)		—			—
所属団体 (体育系 d)		0.45			0.59
所属団体 (文化系 d)		0.54			0.43
所属団体 (その他 d)		0.10			0.17
学生時代成績		0.12			0.03
初職 (サービス d)			—		—
初職 (管理 d)			0.15		0.58
初職 (事務 d)			0.06		0.19
初職 (主婦・無職・学生 d)			-0.10		0.23
初職 (生産工程・労務 d)			0.18		0.45
初職 (販売 d)			-0.04		0.19
総合愛着度				0.12 ***	0.13 **
生活満足度				0.03	-0.06
AIC :	1149.1	1000.6	1220.8	1169.7	918.02

**** : $p < .001$, *** : $p < 0.01$, ** : $p < 0.05$, . : $p < 0.10$

い、ほとんど優無し)、文化系団体に所属していた、などが「自発」系の記述を有意に多くする傾向にある(図3)。また、学生時代の総合的な満足度が高い人ほど、関学への総合的な愛着度が高い人ほど、記述をしている(表7、表8)。

これらの関係を総合的に測るために、「自発」系記述の有無を被説明変数としたロジスティック回帰分析を行った(表9)。二変数間の単純な関係に比べて、総合満足度、成績、所属団体の効果が有意でなくなる。卒業年は負の係数になっているので、卒業年が近年になるほど「自発」系の記述が少なくなることになる。また、性別については女性の方が男性よりも約2.7倍「自発」系を記述する傾向にある。愛着度は約1.1倍の効果になっている。有意な変数の種類は、全くの無回答を欠損値扱いして分析しても同様になる。比較的女性が活動することが多い「PTA」を除外して分

析しても同様な結果になる。

3.4 「仕事」としての“Mastery for Service”

次に、“Mastery for Service”を「仕事」に関連づけて意識するという記述を分析してみる。職業の中には例えば「公務員」のように、そもそも「公僕」という性質をもった職業がある。一方で、現代資本主義社会の多くの職業は利益を生むことが大きな目標になっており、「己れ個人の富を積むことではなく、かえって世に仕えること」を実践する場としては自律的な意識が必要となる。

そんな「仕事」に関連した回答は少なからずあり、「仕事」、「職場」、「会社」、「お客様」、「業務」、「顧客」、「公務員」を「仕事」系の単語としてコード化すると、「仕事」系の記述は全体の約18%、具体的記述の中では、約38%を占める(表6)。属性との関係では、男性、文化系団体所

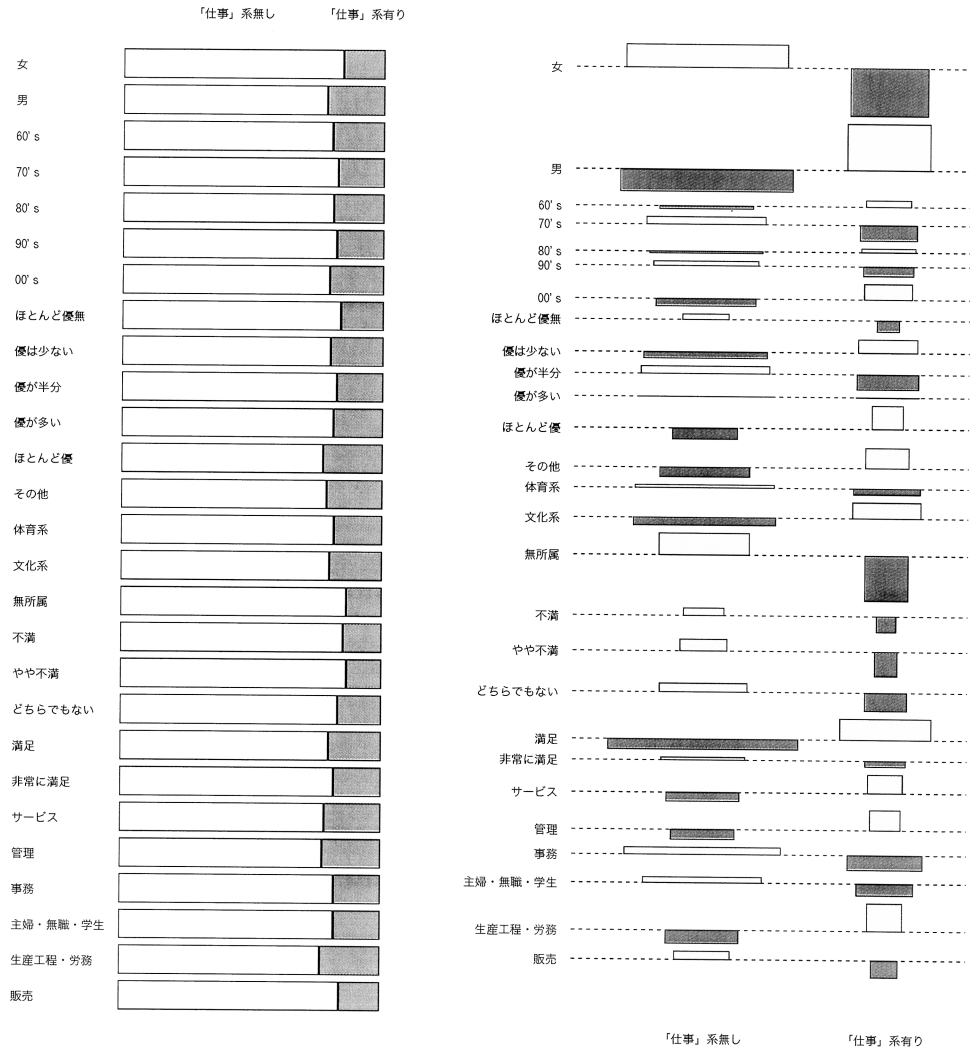


図4：回答者属性と「仕事」系記述有無との関係

属、といった人たちが有意に「仕事」系を多く記述する傾向にある（図4）。学生時代の総合満足度については満足度が高い人ほど、関学への総合愛着度については愛着度が高い人ほど、多く記述する（表10、表11）。

これらの諸項目をまとめてロジスティック回帰分析に投入して「仕事」系記述の有無への関連を分析したのが表12である。二変数間の単純な関係に比べて、総合満足度との関連が有意でなくなっている。一方、成績、初職の関連が有意なものとしてあらわれる。男性は女性の約1.5倍、文化系やその他の団体に所属している人は無所属に比べて約1.6倍、「仕事」系の記述をする可能性が高く

なる。初職に関しては、主婦・無職・学生や事務に比べてサービス業に就いた人の方が約1.6倍、「仕事」系の記述をすることになる。愛着度はここまでのすべての分析で効果があった。無回答を排除した分析をおこなうと所属団体や成績の影響は有意でなくなる。

4 まとめ

以上ここまで、社会学部卒業生調査のデータに基づいて、関西学院大学社会学部で学んだ者がスクールモットーである“Mastery for Service”を意識している場面に関する自由記述を紹介してき

表10:「仕事」系記述の有無と総合満足度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.04	0.18
標準偏差	(1.68)	(1.67)	(1.71)

$$t = -2.25, df = 563.52, p = 0.02$$

表11:「仕事」系記述の有無と関学への総合愛着度

	全体	記述無	記述有
平均値	0.00	-0.13	0.56
標準偏差	(2.39)	(2.40)	(2.27)

$$t = -5.39, df = 624.07, p = 0.00$$

表12:「仕事」系記述の有無に関するロジスティック回帰分析

	model 1	model 2	model 3	model 4	model 5
切片	-10.19	-1.96 ***	-1.30	-1.74 ***	-5.02
卒業年	0.00				0.00
性別 (女性 d)	—				—
性別 (男性 d)	0.44 ***				0.44 **
学生時代総合満足度		0.08 *			0.02
所属団体 (無所属 d)		—			—
所属団体 (体育系 d)		0.33			0.26
所属団体 (文化系 d)		0.50 *			0.47 *
所属団体 (その他 d)		0.57 *			0.51 *
学生時代成績		0.04			0.12 .
初職 (サービス d)			—		—
初職 (管理 d)			0.04		-0.08
初職 (事務 d)			-0.24		-0.41 .
初職 (主婦・無職・学生 d)			-0.25		-0.48 *
初職 (生産工程・労務 d)			0.08		-0.25
初職 (販売 d)			-0.41		-0.53
総合愛着度				0.12 ***	0.12 ***
生活満足度				0.07	0.06
AIC :	2044.6	1796.9	2060.8	1934.3	1660.8

****: $p < .001$, ***: $p < 0.01$, **: $p < 0.05$, .: $p < 0.10$

た。意識する場面について具体的記述をすることができる回答者は、そうでない回答者に比べると、“Mastery for Service”の理解がより深い、と看做すとすれば、ここまでの分析はその理解の内容を紹介するだけでなく、記述の有無や特定単語群の有無と回答者の属性や経験・状態との関係を分析することにより、どのような要因がスクールモットーの理解と関連があるのか、その一端を明らかにすることにもなっただろう。

具体的に記述された場面としては、回答者の仕事に関するものが多かった。福祉の仕事であるとか、公務員であるとか、仕事の性質が「奉仕」的であるような回答がある一方で、そうでない職業においても「人との関係」や「客に対する態度」として“Mastery for Service”を意識するというものがあった。具体的には、以下のような記述があった。

兵庫県庁に入ったときから先輩で人事課長もおられ、いつもマスタリー・ホーサービスの精神で、公人として勤務しなさいと言われていました。

仕事をしている時に意識したことがあります。隣人のことを考え、周りの人のため尽くすこと (Service) で、結果的には自分の能力を磨く (mastery) できると考えながら働かせてもらってます。

若い頃は他人を押しつけてものしあがろうと思っていました。しかし、社内で部下を持ち、取引先の人々とお付き合いをし、さらに海外の取引先、提携先と交流するに至って、「人の為にさせて貰う」気持ちを持つように

なりました。自分は自分一人でこの世にあるのではない、先ず自立して、出来れば人の為になるように努力する、これが我が身にも良く返って来る事に気付きました。

また、ボランティア等の自発的な奉仕活動に言及しているものも多くあり、具体的には以下のような記述があった。

子供を持ってから PTA 活動などに参加するようになり、子供の登下校の安全見守り、学校の清掃お手伝いなど奉仕の精神はどの場面においても必要な心であると感じました。

大学に入って “Mastery for Service” という新しい概念に出会ったことは、新鮮でした。以後も生き方の底に流れていると感じます。特に阪神大震災での地域での出来事やふれあいの折りに強く感じました。現在、地域でのボランティア活動ができているのも、Mastery for Service の精神です。(とはいえ…Mastery for Service とはどういうものかと問われると窮しますが)

子育ての為に社会から遠ざかっていた私が、最初に復帰をした場が PTA の本部役員でした。この時はくじで仕方なく引き受けましたが、自分の中の精神がよみがえり、次年度は幼稚園の副会長、その次年度には子供の所属するサッカー部の部長を請われるままに引き受け、誠心誠意努めました。周囲の人の中には、一銭にもならない事を、と不思議がる人も多数おりましたが自分は奉仕の精神を大切に思える人間で良かったと実感致しました。

回答者の約半数は具体的記述を回答してくれている。この数値を多いものとみるか、少ないものとみるか、その評価はできない。

“service” に注目した回答が目立つ中で、“mastery” に関する記述もあった。例えば、以下のようなものである。

仕事も現在やっている平和学習のためのボランティアガイド（〇〇〇〇〇島の案内）も “Mastery for Service” が基盤となると思う。いつも意識はしていないが、良い仕事、良いボランティアガイドをするためにはそのための準備（研究・工夫・学習など）が必要。Mastery が重要となる。

職業上、Mastery for Service を意識することは多々あります。他者にとって有益なものを多く、分かりやすく提供するためには、練達が大変重要だと痛感します。また、最近では電車内の KG 広告を見ては日々考えさせられます。即ち完成された所に安住するのではなく、挑戦を続けること、そしてその過程というものが、肝要であるということ。仕事に生かさないと考えさせられます。

銀行に勤務する私にとって取引先の成長を強いのぞむ事は当然の事である。金融という業を通じて少しでもその企業の成長に役立ってもらう為には、まず自分自身の修練が必須であり、企業に対しての役立ちを “奉仕” ととらえるならば、自己研鑽は練達である。そういった場面に直面した時に、スクールモットーをよく思いだし、更に仕事に邁進している。

この他に意識する場面として、学生スポーツの活躍に触れた時であるとか、学院の広告を目にしたときなど、関西学院の存在が特に想起されるような場面を挙げている回答もあった。

各変数と具体的記述の有無との関係をまとめてみると次のようになる。

卒業年との関係は、全体的な記述の有無についても、そして「自発」系の記述の有無についても有意であった。卒業年が近年になるほど、記述がない可能性が高くなるという関係である。しかし、「仕事」系に関しては卒業年と記述の有無の間には有意な関係は見られない。卒業直後の年代のものにとっては、社会人生活をはじめたばかり

表13：三変数の偏相関行列

	具体的記述の有無	総合愛着度	総合満足度
具体的記述の有無	—		
総合愛着度	0.22	—	
総合満足度	0.02	0.03	—

(下線付きの数字は有意でない偏相関)

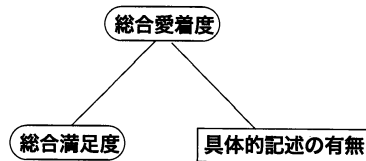


図5：三変数の無向グラフ

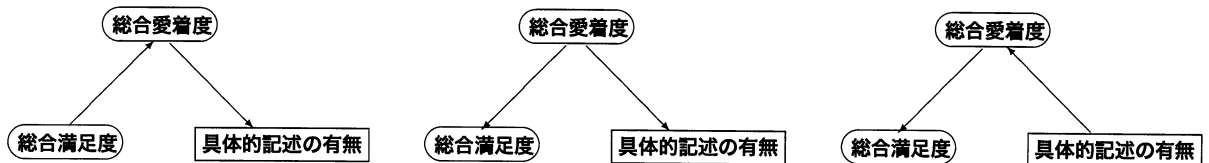


図6：可能な有向グラフ

の環境で、「自発」系の活動をしづらい環境にあることが想像される。また、PTAや地域活動等、ある程度年齢層に偏りがみられる活動もある。一方、「仕事」については年代に関係なく経験できるものである。それゆえ、このような関係が表出したものと解釈できる。

性別については、全体的に女性よりも男性の方がより具体的な記述を残す傾向がある。しかし、「自発」系の記述についてのみは、男性よりも女性の方が有意に多く記述している。卒業生の属性もしくは生活の状況によって、“Mastery for Service”を意識する場が異なるということがいえる。

初職の効果は、「仕事」系の記述についてのみ有意で、サービス業に就いたものに比べると、事務や主婦・学生などが初職であるという人は仕事に関する言及の可能性が低いという関係である。

生活満足度については、全体的な記述の有無については有意な関係が見られ、満足している人ほど記述をする傾向にある。ただし「自発」系や「仕事」系の記述の有無には影響がない。

所属団体の違いは、全体的な記述の有無、そして「仕事」系の記述の有無については有意な影響があった。無所属だった回答者よりは、特に文化

系の団体に属していた回答者がより多く回答する傾向にある。ただし、「自発」系の内容に言及するか否かには所属団体の効果はない。

学生時代の成績については、全体的な記述の有無、「仕事」系の記述の有無については効果が見られたが、「自発」系の記述については有意な効果はなかった。

学生時代の総合満足度については、単相関レベルでは全体的にも個別の記述にも有意な関係があった。学生時代の諸項目に満足している人ほど、意識することの具体的な記述を書く傾向にある。しかし、多変量解析に投入するとその効果は見えなくなった。今回分析した変数の中では、総合愛着度で統制することによって総合満足度の効果は消える。満足度と愛着度の相関は $r=0.35$ である。満足度そのものが“Mastery for Service”への意識を高めているわけではなく、関学に強く愛着を感じるようになっているか否かがポイントとなるといえる。

総合愛着度の効果は、今回のすべての分析で有意な効果として確認されている。愛着度が高いほど、具体的な記述がある可能性が高くなるのである。

以上のようにここまでの分析では、Mastery

表14：六変数の偏相関行列

	性別	総合満足度	総合愛着度	具体的記述の有無	学生時代成績	生活満足度
性別	—					
総合満足度	0.06	—				
総合愛着度	-0.06	0.33	—			
具体的記述の有無	-0.09	<u>0.01</u>	0.21	—		
学生時代成績	0.33	0.19	-0.05	0.07	—	
生活満足度	<u>0.00</u>	0.11	0.05	0.06	<u>0.01</u>	—

(下線付きの数字は有意でない偏相関)

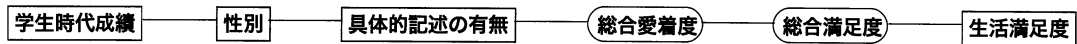


図 7：六変数の無向グラフ

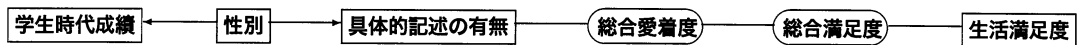


図 8：六変数の有向グラフ（仮定）



図 9：六変数の可能な有向グラフ

for Service を意識する具体的な場面の記述の有無に影響する要因を提示してきた。しかし、それらの変数間の因果関係については、分析の性格上あくまで仮定的なものであった。どちらの変数が原因でどちらの変数が結果であるのか。例えば、愛着度が高まることによってスクールモットーに関する理解が高まり具体的記述が増えるのか、それとも、スクールモットーを理解することが愛着度を高めるような効果があるのか。二変数間の関係の分析やロジスティック回帰分析では、どちらがより妥当なのかはわからない。そこで、最後にグラフィカルモデリングの手法を使って因果推論をおこなってみる。まずは、具体的記述の有無と、総合愛着度、学生時代総合満足度の三変数の関係から推論を試みる。この三変数間の偏相関行列は表13のとおりで、総合愛着度を統制した総合満足度と具体的記述の有無の偏相関についてのみ、有意でない。この偏相関構造を無向グラフで表すと、図5のようになる。この無向グラフのような偏相関構造を生成する因果のプロセスは、図6のような三つの可能性がある。つまり、逐次的な関係の中では、総合満足度と具体的記述の有無のそ

れぞれが総合愛着度の原因になるという可能性のみが否定できたことになる。それでも、総合愛着度が具体的記述の有無の原因となるのか、結果となるのかは特定できていない。

そこで次に、性別、学生時代総合満足度、学生時代成績、総合愛着度、生活満足感、具体的記述の有無、という6つの変数を使用した因果推論をおこなってみる。表14のような偏相関行列から、最もシンプルな関連の構造を抽出すると図7のようになる¹³⁾。6つの変数の中では、性別が他の意識や行動によって変化することは原理的にあり得ない。そこで、性別に関わる辺については、すべて性別を始点とする矢線にしたグラフを仮定してみる（図8）。このグラフに適合的なデータ生成プロセスを表す有向グラフを推測すると、残りの全ての辺についても一意に方向が定まるので、図9が導出される。この分析の限りにおいては、“Mastery for Service”の具体的記述（つまりはスクールモットーの理解）は関学への愛着度を促進し、愛着度は関学への満足度を上昇させ、そしてその満足度は現在の生活の満足度にもつながる、という因果関係が推測される。極端に言え

13) 共分散選択にあたっては、Rのパッケージ“gRaphD”を使用した。選択の基準はBICを用いた。性別と具体的記述の有無は離散変数として扱い、その他の変数は連続変数として処理している。

ば、スクールモットーを深く理解することは卒業生の現在の生活満足度につながるということもできるだろう。では、その理解はどのようにして深められるのか、ここでの分析では具体的記述の有無は因果過程の上流に位置しているので、要因を特定できていない。その点については、稿を改めて論じていきたい。

文献

- Edwards, D., de Abreu, G. C. G. and Labouriau, R., 2010, "Selecting high-dimensional mixed graphical models using minimal AIC or BIC forests," *BMC Bioinformatics*, 11: 18.
- 日高義博, 2009, 「大学改革と建学の精神」, 『大学と学生』, 72 : 2-5.
- 中野康人, 2010, 「社会学は「役立つ」学問か — 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析 (2) —」, 『関西学院大学社会学部紀要』, 110 : 23-32.
- 菅真城, 2008, 「国立大学に建学の精神はあるか」, 『広島大学文書館紀要』, 10 : 1-22.
- 杉村芳美, 2006, 「私立大学における建学の精神の継承」, 『大学時報』, 55(307) : 10-13.
- 渡邊勉, 2010, 「大卒者の入職過程と職業キャリア— 関西学院大学社会学部卒業生調査の分析 (1) —」, 『関西学院大学社会学部紀要』, 110 : 1-21.

“Mastery for Service” internalized in the graduates:

— Analysis of a survey of alumni of School of Sociology at Kwansei Gakuin University (5) —

ABSTRACT

The purpose of this paper is to describe how alumni of the Faculty of Sociology at Kwansei Gakuin University internalize their school motto “Mastery for Service”. Analysis of a survey of alumni of the Faculty of Sociology reveals concrete situations when alumni are conscious of the motto. One of the most mentioned terms in their response is “work” related terms. “Voluntary activities” is also frequently mentioned. Age, gender, occupational experience, satisfaction, attachment and grades in university are examined as to whether they have any effect on alumni’s recognition of the motto. We find that internalization of the motto promotes feelings of attachment to KG and satisfaction with their former school lives and their current lives.

Key Words: school motto, text analysis, causal inference